

鳥取県立むきばんだ史跡公園

鳥取県立むきばんだ史跡公園は、先史時代の遺跡を含む重要な遺跡の保存・研究・理解を目的とした大規模な公立公園です。遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期（紀元前1世紀-紀元後3世紀）のもので、ここは数百戸の家屋などが建ち並ぶ人口の中心地で、紀元2世紀後半に最盛期を迎えました。この村の活動は、アジア大陸から文字が伝わってくる数世紀前のものがあったため、その文化、技術、および交易での他地域との交流は考古学調査から浮き彫りにする他ありません。妻木晩田の弥生時代の遺跡はこの時代で発見されているものの中では最大で、この史跡公園は考古学研究の場であると同時に、教育の場でもあります。

石器時代から鉄器時代へ

むきばんだ史跡公園では、約950棟の建物の遺構が発掘されており、それらは7つの互いに緊密に接続された地区に広がっています。この場所は弓ヶ浜半島を見下ろす大山の麓にある、広くてなだらかな森の中腹に位置しています。ここでは1931年に最初の遺跡が発見され、1997年から大規模な発掘調査が開始されました。最古の遺跡は紀元前100年頃のものですが、ほとんどの遺跡は紀元後3世紀頃のもので、この時代の日本ではまだ石器が主流でしたが、鉄器の遺構も多く発見されており、新石器時代末期から鉄器時代への大きな技術転換期を迎えたことを物語っています。また、中国で作られた青銅鏡の破片や、ガラスビーズなどの交易品も出土しており、妻木晩田がこの時代大きく広がっていた交易網に属していたことがわかります。

古代の建物の内部設計

建物の遺構の多くは保存のために埋め戻され、その大きさやその他の詳細情報が看板に記されています。約21棟の建物が元の場所に再建されています。そのうち9つは、地表から約1メートル掘ったところに生活空間が設けられた円形の竪穴式住居です。頑丈な木の柱を垂直に土の中に沈め、水平の梁と連結して構造躯体を作りました。躯体の枠に苗木を斜めに敷くことで屋根の斜面を形成し、その上から葦などで覆いました。頂上には煙が出るように開口部を設けました。屋根付きの玄関も典型的なものでした。いくつかの発掘現場では幅広の木の板が発見されていますが、これは建物の中にはより頑丈な屋根を持つものがあったことを示唆しています。復元実験の結果、これらの木板は土の屋根を支えるだけの強度があったことがわかり、一部の再建では土の屋根が再現されました。発掘で多くの場合炉の位置が判明したので、炉も再現されており、またそれを取り囲むように作られた、日用品の保管に使われたと考えられている土製の幅広い棚も再現されています。一部は再建途中のままの状態とすることで、建築作業の様子がわかるようにしています。

穀物や貴重品の倉庫

妻木晩田でよく見られるもう1つのタイプの建物は、高床式倉庫です。これらは通常長方形で、地面から2メートルの高さに作られました。穴の空いた木板が見つかり、どうやら縄で結んで壁をしっかりと固定していたようです。復元されたものには、このタイプのもののほかに、杉の皮を編んで作った壁のものがあります。倉庫を地面から浮かせることで、齧歯類の動物の侵入を防ぎ、中身を地面の湿気から守ることができました。

大きな共同体の一部を窺うのみ

壁を持った珍しい構造の大きな竪穴式住居が発見されており、現在のところこれは指導者の住居ではないかと推測されています。また、この場所からは石を墓石にした約39の埋葬用の盛り土も見つかり、その多くはここ以外日本のどの地域にも見られない特徴的な角ばった形になっています。数百もの建物の遺構が発掘されていますが、専門家は、これは実際の集落の建物全体の10分の1程度に過ぎないと考えており、実際の集落は現在の公園の境界をはるかに越えて広がっていたと考えられています。

弥生時代生活の展示

むきばんだ史跡公園には、弥生の館むきばんだというビジターセンターがあります。ここには、道具や土器などの出土品を展示した博物館や、農業や道具作り、家づくりなどの活動を紹介したジオラマがあります。食べ物、服、土器、交易など、弥生時代の生活のあらゆる側面が説明されています。ワークショップスペースでは、弥生式の土器作りや道具作りなど、さまざまな活動が行われています。そのすぐ近くには考古学展示センターがあり、その中には発掘された3つの竪穴式住居の遺構が展示されています。説明のために、発見された時の状態で保存されています。来館者は、野外の発掘活動エリアで発掘の技術を学ぶことができます。